



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ニコラウス・クザーヌスにおける「対立物の一致」
Author(s)	岩崎, 允胤
Citation	北海道大學文學部紀要, 12, 21-36
Issue Date	1964-03-18
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33287
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_P21-36.pdf



ニコラウス・クザーヌにおける「対立物の一致」

岩崎允胤

ニコラウス・クザーヌスにおける

「対立物の一致」

岩崎允胤

1 主 題

その昔エーゲ海の東海岸イオニアに、ヘシオドスの神々の系譜を自然的物質の自己展開に移しかえることによつて哲学的思想が誕生した。それ以来、長い時代的変遷を経て今日にいたるまで、基本的には唯物論と観念論との闘いが全歴史を赤い糸のように貫いているが、その闘いのなかで蓄積されてきた全達成は、たとえ観念論的倒錯の著しい場合にも、われわれにのこされた思想的遺産たるを失わない。本稿で取扱われるニコラウス・クザーヌスは十五世紀前半、まだ中世的思维の小暗い襷たすきのなかからルネサンスの光が射しそめた頃、ディオニュシオス・アレキオパギテスの神秘思想の影響のもとに、絶対者、神を、数学的象徴に依拠しつつ、哲学的思弁をもつて否定的に媒介しようとした哲学者である。かれの名は、二十年あまり前わたくしの青少の胸に、あの一であり無限である自然、無数の世界（あたかも無数の銀河系）を展開し包含する宇宙、そこにおける運動の基本法則としての反対物の一致（coincidenza de contrariis）を熱情をこめて主張したジョルダーノ・ブルノーの名とともに

に、その先駆者として、消しがたいほど鮮やかに灼きつけられた。今、かれのもとに長らく滞りとどまる十分のいとまはないが、仕事の間にできた数日の余暇の谷間を利用して、これまで折々に読み耽つたかれの諸著作のなかからかれの中心思想の一つである対立物の一致（coincidentia oppositorum）をとりあげ、その哲学的内容を集中的に考察してみよう。わたくしはこの主題を、自然についての弁証法的思维の歴史のなかに位置づける。

ところで、先立つ思想を弁証法的思维の歴史のなかに位置づけようとするとき、ヘーゲルがそれをどのように把握していたかを顧みておくのは一つの常識である。しかしかれの『哲学史』のなかにはクザーヌスの思想は触れられていない。だがそれにもかかわらず、ヘーゲルの思想のなかにはクザーヌスの矛盾の同一の思弁が継承されているようにみえる。たとえば『大論理学』の第二版の序文には「思弁の所産であつて悟性にとつては脊理的と思われるところの対立物の一致（die Vereinigung Entgegengesetzter）」⁽¹⁾という言葉があり、武市氏もその訳文で coincidentia oppositorum と補つておられるが、ヘーゲル哲学にとつての基本的な見解を含むこの言葉はかりにクザーヌスその人のものであるとしても、いささかの不似合いさを感じられないほどである。というのは、かれもまた対立物の一致を悟性（ratio）ではなく思弁（speculatio）に帰しているからである。ヘーゲルはまた書いている、「……この弁証法的なもの

るいは肯定的なものを否定的なものにおいて把握することのなかに思弁的なもの (das Spekulative) は存する⁽²⁾」等々。このかぎり、三百数十年の歴史を超えて、クザヌスの思想は、ヘーゲルの思想とことのほか近いようにもみえる。ところで、この親近性は否定しえないとして、それでは両者の基本的決定的な相違はどこにあるのか。

次に、本論に入るに先立ち、本稿で使用するテキストについて簡単に述べておく。まず、今日手に入れやすい全集版として

Nicolai Cusae Cardinalis Opera, Parisiis 1514, vols. 3. Unveränderter Nachdruck, Minerva G. m. b. H. Frankfurt / Main, 1962.

がある。また、まだ全著作の刊行にはいたっていないが、

Nicolai de Cusa opera omnia, iussu et auctoritate academiae litterarum Heidelbergensis ad codicum fidem edita, Leipzig, 1932ff. が重要である。本稿で引用されている著作のうち、De docta ignorantia (1440), Apologia doctae ignorantiae (1449), De non aliud (1462) は後者の版に含まれている。De coniecturis (1440), De genesi, De visione dei は前者つまりパリ版によつた。なお、Apologia doctae ignorantiae も、ハイデルベルク校訂本が手許なので、パリ版によつた。引用のさい見られるfol.はこの版の頁付けである。

(一) Hegel, Wissenschaft der Logik, hrsg. von G. Lasson, 1 Teil, S. 10. 『大論理学』武市健人訳、上巻の一九頁。ただし訳文は必ずしもしたが

っていない。

(2) Ibid., S. 38. 前掲訳、四三頁。

2 「最大なもの」(神)における

「対立物の一致」

「対立物の一致」の思想は、かれの最も有名な著作『知ある無知について』⁽¹⁾においてばかりでなくかれの諸著作の多くの箇所に見出される。もともと、coincidentia oppositorum という術語自体は『知ある無知について』のなかには存しない⁽²⁾。しかし、この術語は coincidentia contradictoriorum (矛盾物の一致) とともに、かれのその他の代表作、たとえば、『神の直視について』(De visione dei) や『推測について』(De coniecturis) など多くの著作のなかに見出される。とはいえ、対立物の一致の思想を哲学的体系的に展開しているものとしてとりあげるべきは、何といつても『知ある無知について』である。

『知ある無知について』全三巻中第一巻の主題は「絶対的な最大なもの」である。これはクザヌスにとつて神の思弁的概念である。かれが「神」ではなくこの思弁的概念を用いたのは、ヘブライ語で *ioth · he · vau · he* と呼ばれる場合を除けば、どのような神の名称もすべて被造物との関係において言われているにすぎず、したがって、真の神の存在の仕方にはふさわしくないと考えたからである。なお、この「絶対的な最大なもの (maximum absolutum)」が「縮限された最大なもの (maximum contractum)」つまり宇宙、お

よび「縮限されていると同時に絶対的な最大なもの」(maximum, quod simul est contractum et absolutum)つまり仲保者イエスと区別されることに注意しておく必要がある。この絶対的な最大なものは「それより大きなものは何も存在しえないもの」とされており、この概念がアンセルムスの神規定から由来しているのは明らかである。

さて、クザーヌスはこの第一巻において「唯ひとり近寄りえない光のうちに住むものの導きのもとに、人間の悟性を^{フレイ}超え、把握されえないような仕方です」神における諸対立物の一致についての思弁を展開するが、その思弁においてかれは、六世紀頃の新プラトン主義的な神秘学者偽ディオニシオス・アレイオパギテスからのわけでも大きな影響のもとに(さらにエックハルトのドイツ神秘主義の伝統のうえに)、中世的思惟の幽暗な霧になお深く包まれながら、超越的の神の威信のまえに跪いている。

「絶対的な最大なもの」(以下しばしば簡単のために「最大なもの」と呼ぶ)についてクザーヌスが述べている最も基本的な命題は、それが「最小なもの」と一致することであり、これこそ coincidentia oppositorum の思想にほかならない。かれにとつてなぜ両者が一致すると考えられたかという点、「最大なもの」は存在しうるかぎりのどんなものでもあるから、それよりも大きなものが存在しえないばかりでなく、それよりも小さなものも存在しえないからである。念のためにいえば、さきに述べたように、「最大なもの」は神の思弁的概念であるから、両者の一致は、たんに神

における対立物の一致のたとえば一例とでもいえるものではなく、むしろ神における対立物の一致の根本本質として理解するべきである。

クザーヌスは、この両者の一致が、およそ事物を対立においてみる悟性とその推論によつては捉えられないことを指摘して、書いている、「対立は超えるものと超えられるものとを許すものども(より大ありより小さくもあ)にたいしてだけ適合するのであり、しかも、こうしたものどもにたいしても、さまざまな差別をもつて適合するのである。しかし、『絶対的に最大なもの』にたいしては、対立はけつして適合しない。なぜなら、『絶対的に最大なもの』はいつさいの対立を超えているからである。したがつて、『絶対的に最大なもの』は、絶対的に現実には、存在しうるところのすべてのものである、かつ、どんな対立をも欠いていて、『最大なもの』においては『最小なもの』が一致するほどである、それゆえ、『絶対的に最大なもの』は、いつさいの肯定を超えていると同様にいつさいの否定をも超えている。」ところで、われわれの悟性は「それみずからの原理において矛盾するものどもを推論の道によつて整合(統)することができない」のであり、その対象は「限りなく相距つて矛盾するものどもを一緒に結合(統)することができない」ところの自然的な諸事物に限られている。したがつて、「最大なもの」と「最小なもの」との一致を——無知において——知るためには、悟性のいつさいの推論(discursum)を超えなければならない。

クザーヌスのこの対立物の一致の思想にたいしては、当時すでに

たとえばヨアンネス・ヴェンクス (Joannes Venecus) によつて、「同じものが有り且つ有らぬことは不可能である」といういつさいの学問の原理(矛盾律)を否定し、全神学の体系の存立を危くするものである、として批判された。これにたいし、クザヌスは、有限的な事物の領域においては「任意のものは有るか有らぬかである、」つまり矛盾律が支配している、しかし「論理学とすべての哲学的な探究はけつして直視には達しない」と答えている。同様な思想をクザヌスはまた次の或る手紙のなかでしるしている、「ディオニュシウスはいたるところで分離を超えて繋合と一致へと——そこでは除去(定^否)は措定(定^肯)と一致する——飛躍する、そして、あの一致こそ、すべての哲学の共通な原理すなわち二つの矛盾するものどもは一致しないという原理が存立するかぎり、哲学者はなにびとも達していないし、また達することができないところの最も奥義的な神学である。」⁹⁸

さて、クザヌスによれば、「最大なもの」においてはすべての対立は一致するのであるが、わたくしはここでとくに、直と曲との一致についてのかれの思弁に注目しておく。かれは、円の直径(直線)と周(曲線)とを比べ、曲線がその曲度においてより、少なく、を受け容れるに依じて、円周はより大きな周に属することになるのであり、したがつて、最大な円の円周は最小度に曲つており、つまり、最大度に直である、とし、「それゆえ」とかれは書いている、「『最小なもの』は『最大なもの』と一致する、したがつて、最大な線が、最大度に直で、最小度に曲がつているということが必然

的なことは、一目して明らかである。」⁹⁹ いいかえれば、最大な線においては、曲は直であり、両者の対立は超えられているというわけである。——以上のなかに、二つの見解を注意することができる。

第一は、曲線を直線とみなす見解であり、この見解は微積分学の原理のなかに含まれているものである。第二は、二つの区別されているようにみえる平行直線も最大な線としては交わるという見解である。しかし、これらの見解もそれを象徴として「絶対的な最大なもの」に上昇するために述べられているにすぎず、当代における屈指な数学者であつたかれも、数学の領域でこの見解を展開してはいない。たとえばかれは書いている、「知性が真理にたいする関係は、ちようど、多角形が円にたいする関係のようなものであつて、多角形は、多くの角をもつものとして書かれれば、それだけいつそう円に類似したものになるが、しかし、角を無限に増加したとしても、この多角形が円との同一性に帰着するのではないかぎり、けつして円と等しくされることはないのである。」¹⁰⁰ このようにクザヌスはお、数学的な無限接近にたいし厳密な真理性を帰することができないでいる。

クザヌスにとつて、上述のように、「絶対的な最大なもの」と「最小なもの」とは一致するが、ここから、そこではいつさいの反対、対立、矛盾が一致していることが知れる。かれの著作からは、*omnis diversitas est identitas*. (どんな相違性も同一性である)、*omnis alteritas est unitas*. (どんな他性も一性である)、*distinctio est indistinctio*; *indistinctio est distinctio*. (区分は無区分であ

り、無区分は区分である)、『trinitas est unitas, unitas est trinitas (三性は一性であり、一性は三性である)』等々の矛盾的一の命題を多々引き出すことができる。ヘーゲルの引用で有名なスピノーザの命題『omnis determinatio est negatio. (すべての規定は否定である)』や『affirmatio est negatio (肯定は否定である)』などがそのままの表現でクザヌスの残された著作の中に見出されるかどうかについては、わたくしは詳らかにしないが、それらがかりにそのなかに見出されたとしてもいづこうに不思議ではないほどである。しかも注意すべきは、かれが、この命題の形式の *est* P (主語—繫辞—述語) を考察し、そこに弁証法的統一を見出していることである。unitas est maxima (一性は最大なものである) という命題についてかれは書いている、『わたくしが『一性は最大なものである』と言うとき、わたくしは三性をいみしている。というのは、わたくしが $\wedge$ 主語として $\vee$ 『一性』と言うときには、始めのない始めをいみしており、 $\wedge$ 述語として $\vee$ 『最大なもの』と言うときには、始めからの始めをいみしており、それらを動詞『である』によって繋ぎ合一するときには、両者からの進出をいみしているのだから。』この引用文中「始めのない始め」とか「始めからの始め」とか「両者からの進出」などかれ固有の概念内容を一応捨象して命題の形式をれ自体についてみれば、クザヌスがこの命題について「繫辞において主語と述語との同一が定立されている」ことを指摘していることが知られるのであつて、これは、のちにヘーゲルが繰返し強調したところの判断形式のもつ弁証法にほかならない。ところで、今

かりに捨象したところのものは三一性——表象的はいわゆる三位一体——の内容にかかわるのであつて、この点については節をあらためて論じることにはしたい。

なお、クザヌスは、右の命題のなかで指摘した対立物の一致を端的に「矛盾物の単純な一性(統一)における整合」(contradictorium copulatio in unitate simplicis) とも述べている。

(1) この著作について『学識ある無知』という訳名が近年おこなわれているが、次に述べるようなクザヌスの思想からみて、『学識』という訳語は適当ではないようにわたくしは思う。「脱却によつて精神の直視に向かうところの知識、このようなものが知ある無知である。」「それゆえ、すべてが棄て去られるとき、神が見出される、主においてはこの闇が光である。ディオニシオス以前と以後のすべての賢者たちが試みたように、あのような知ある無知におつて、神へと近づいていこうであらう。』Apologia doctae ignorantiae, Parisiis, fol. 35 v, 38 r; cf., Augustinus, Epist. ad Probam, P. L. 33, 505; Bonaventura, In sent., II. d. 23a. 偽ディオニシオス・ブレイオパテス「いっそうすぐれたいみでの完全な無知 (*ἀγνοία*) は、すべての認識されるものを超えているものについての知 (*γνῶσις τοῦ ἀπείρου καὶ τὰ ὑπερῶς ὄντος*)」P. G. 3, 1065b. なお、本稿第五節の(4)神秘主義の項を参照。

(2) だが、『知ある無知の弁明』には見出される。

(3) 「縮限」は *contractio* の訳語。クザヌス哲学の最も基本的なカテゴリーの一つであつて、宇宙(普遍)類、種、個物へと下降的に限定されることをいみする。

(4) 「縮限された最大なもの」と「縮限されていると同時に絶対的な最大なもの」はそれぞれ「知ある無知について」の第二部、第三部をなしている。第五節の註(5)を参照。

(5) De docta ignorantia, I, cap. 2, p. 7.

(6) Ibid., cap. 5, pp. 10—11.

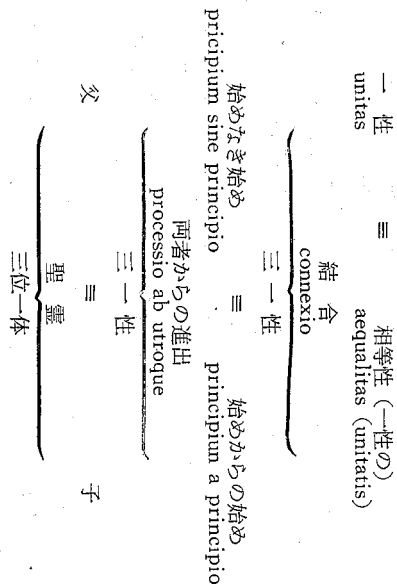
ニコラウス・クザヌスにおける対立物の一致 岩崎

- (7) Apologia doctae ignorantiae, fol. 37 r.
(8) Cf. Nicolaus Cusanus, Vom Nichtandern, übersetzt und mit einer Einführung und Anmerkungen versehen von P. Wilpert, S. 199.
(9) De docta ignorantia, I, cap. 13, p. 26.
(10) Ibid., I, cap. 3, p. 9.
(11) Ibid., I, cap. 10, p. 21.
(12) Hegel, Encyclopädie, § 171. 『小論理学』松村一人訳、岩波文庫、下巻、一四一頁。
(13) De coniecturis, I, cap. 8, fol. 44 r. われわれは、クザヌスにおける simplex (〈sim (gr. *μία*) + plico〉), simplicitas のうちに「ヘーゲルの einfach, Einfachheit の古典的意義をみる」ことができる。次節の註(6)を参照。

3 三 一 性

さて、クザヌスによれば、いわゆる三位一体 (Trinitas) は「あの朽ち果てる(地上)事物にたいする或る類似性のゆえに」父、子、聖霊の三つのペルソナとして呼ばれているが、しかし、この呼称は「絶対的な最大なもの」である真理自体からは「きわめて遠く距たつている」⁽¹⁾。真理自体は、一性、一性の相等性、結合という三性の統一としての三二性でなければならない。(この関係において、一性を「始めなき始め」と考えれば、「始めなき始め」、「始めからの始め」、「両者からの進出」という前節の終りでみた三二性が成り立つ) この三二性を被造物との関係においてみた場合、一性が父、一性の相等性が子、結合が聖霊と呼ばれるにすぎないのである。というの、神は、一性としては生み出すもの、一性の相等性としては生み出されるもの、結合としては両者の愛だからである。かりに

図示すれば次のようになる。



わたくしはここでヘーゲルが三位一体について述べている次の言葉を想起したい。「さて、キリスト教徒がこの三性のなかにその三位一体を探して見出したことは理解しうる。……もしこの三位一体に何らかの意味があるとすれば、われわれはその意味を理解せねばならない。……われわれが問題としうるのは、この三性の概念についてであつて、父とか子とかの表象についてではない、——というの、自然的な諸関係は何らわれわれの関与するところではないから」⁽²⁾。そしてヘーゲルが、三重性 (Triplariat) の空疎な使用——形式主義——に反対しながらも、かの三位一体の教義のなかに絶対的な思弁的内容を捉えていることは周知のとおりである。それでは、クザヌスの捉えている思弁的内容、すなわち、一性と相等性と結合という三性の統一はどのようなものであるか。かれは、これら三性の関係について、一性から一回的な反覆によって一

性の相等性が生成し、両者から統一^(一)性として結合が進出する所以をかなり詳しく述べているが、次の言葉がよくこの三一性を説明しているようにわたくしは思う、「じつは一性は三性にほかならない。なぜなら、一性は不可分割、区別、および結合を意味しているからである。じつさい、不可分割は一性から来ており、同様に区別も、また同様に合一すなわち結合も、一性から来ている。それゆえ、最大な一性は不可分割、区別、および結合にほかならない。一性は不可分割であるがゆえに、一性は永遠性である、すなわち、それは始めをもたない、永遠的なものは何ものによつても分割されないように。一性は、区別であるがゆえに、不可変的な永遠性から来る。また、一性^(一)は、結合すなわち合一であるがゆえに、両者^(二)と区別^(三)から進み出る」⁽³⁾さきの図式にさらに次のものを加えよう。(クザーヌスの哲学のなかからこのような三一性の図式はその他にもたくさん⁽⁴⁾に書ける。)



それでは、相等性がここで区別として捉えられているのは何故であるか。相等性の生成は、かれにとつて、区別(ヘーゲルのいえば他にあるいは向自有である)の定立にはかならないからである。たしかにかれは、かの三一性について論じるにあたつて、一性は他性に、相等物は不等性に、結合は分割に先立つと述べており、このいみではいかなる区別(他在)も三一性には属しないことは明らかである。そこでの三性はあくまでも「最も単純な絶対的な本質であり、それ

ゆえ、三ではなくて一である。……それゆえ、三つのものには数的な区分はない」⁽⁵⁾しかし、そこにはいかなる区別(他在)も存しないのであろうか。もし存しないとすれば、一性が相等性を生成すること、また、両者から結合が進出することもないはずである。というのは、生成は「或るもの」から「他のもの」が生まれることであり、進出は「或るもの」から「他のもの」への一種の拡がりであるとされるのだから。それゆえ、そこには、なんらかの区別(他在)が存しなければならない。クザーヌスが次のように書くのはこのためである。「わたくしの『神』であるあなたのうちにわたくしによつて見られるところの多性は、他性なき他性(alteritas sine alteritate)である。なぜなら、それは、同一性(identitas)であるところの他性であるから」⁽⁶⁾

それゆえ、前節の終りでも触れたように、三一性は「対立物の一致」において始めて深く捉えられる。クザーヌスはこの思想を次のようにも書いている、「神的なことがらにかんしては、矛盾するものどもを——先に進んでそれらを追い越す^(矛盾があらわれたら先に進んでこれを克服する)——可能なかぎり単純な概念のうちに包括しなければならぬ。たとえば、神的なことがらにかんしては区分と無区分とを二つの矛盾するものとしては捉えてはならないのであつて、先に進んで、それらを、その最も単純な原理のうちに包まれるものとして捉えなければならない、そこでは、区分は無区分にほかならないのだから。そうしたときにこそ、三性と一性とは同じであるということがよりいっそう明らかに捉えられる。なぜなら、区分が無区分

であるところでは、三性は一性であり、逆に、無区分が区分であるところでは、一性は三性であるからである。⁽⁸⁾

- (1) De docta ignorantia, 1, cap. 9, p. 19.
- (2) Hegel, Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie, 1 Bd, hrsg. von H. Glockner, S. 273.
- (3) De docta ignorantia, 1, cap. 10, pp. 20—21.
- (4) Cf. E. Zeller, Cusanus-Konkordanz, 1960, pp. 101—103.
- (5) 前節の註(13)を参照。
- (6) De visione dei, cap. 17, fol. 108 r.
- (7) Ibidem.
- (8) De docta ignorantia, 1, cap. 19, pp. 38—39.

4 「他なものでない」 (non aliud)

クザヌスは『非他(他なものでない)について』のなかで「これ⁽⁹⁾ non aliud 他なものでない⁽¹⁰⁾は、わたくしが、長い年月の間に対立物の一致によつて探究してきたところのものである⁽¹¹⁾」と書いている。じつさい一四四〇年の著作『知ある無知について』から六二年のこの著作にいたるまですでに二十年あまりの長い歳月が流れているが、その間、クザヌスの哲学的思惟はついで神の思弁的概念の把握の問題から離れることがなかった。かれは神を対立物の一致においてみたばかりではなく、「対立物の一致を超える」とか「諸対立の対立」とか「対立なき対立」などとして、さらにまた「同一者」(絶対的同一性)としても捉えようと試みた⁽¹²⁾。だが、ここでは、クザヌスにおけるこうした神概念の展開に立ち入ることを省略して、「他なものでない」としての神概念について考察したい。かつ

てルドヴィッヒ・パウエルは、クザヌスを偽ディオニュシオスと結びつけた研究書のなかで「non aliud」としての神の概念は神における対立物の一致についての概念の結論であり戴冠である⁽¹³⁾」と書いたが、少くもすでに齢六十有余歳を数えた老クザヌスが、これによつて新たな学問的勇気をこめて、盛壯の頃 coincidentia oppositorum の概念によつて捉えようとしたところのもの(神)にいつそう深く根本的な仕方でも迫ろうとしたということは確かである。

さて、クザヌスは「他なものでない」をわれわれにとつて能うかぎり厳密な神についての表示であると考えている。そして「他なものでない」が、存在するかぎりのすべてのものの存在および認識の根拠である所以を次のように説明している、「およそ存在しているものはどんなものでもそれ自身とは他なものではないから、それはこの特性をたしかに他なものから得ていない。したがつて『他なものでない』から得ている。それゆえ、存在するところのものは、『他なものでない』によつてのみ、存在しもし、存在するということを認識されもする。『他なものでない』は、じつさい、存在するところのものの原因、すなわち最も十全な根拠あるいは規定である⁽¹⁴⁾。」ここでクザヌスが「他なものでない」をいつさいのものの存在と認識の根拠とみると、遠くプラトンの善のアイデアを念頭においているのは明らかである。ところで、存在するかぎりのすべてのものは、それぞれそれ自身とは他なものでないことをそれ自身の特性としながら、しかもそのことによつて何らかの仕方でも必ず互に異なつているのであり、それゆえ「他なもの」(aliud)と言われ

る。つまり、「他なものでない」が、存在のうえでも認識のうえでも、これらの「他のもの」に先立つているのである。⁽⁶⁾

これら諸事物については aliud est non aliud quam aliud (他なものは他なものとは他なものでない) と言われるが、神を表示する「他なものでない」については、non aliud est non aliud quam non aliud (他なものでないは他なものでないとは他なものでない) と言われうる。この命題の諸項にかりに便宜上番号を付けておく。

(1) non aliud est (3) non aliud quam (2) non aliud さて、諸事物にかんするさきの命題が、「他なものでない」を媒介とする「他なもの」の規定(定義)であるのにたいし、神にかんするあとの命題は、「他なものでない」のそれ自身を媒介とする自己規定である。

クザヌスによれば、まさにこの自己規定のうちに、三で一な神が「他なものでない」によつて表示される根拠がある。この自己規定にみられる三一性を、前節で論じた三一性の三契機との照応においてみれば、左の番号を付した三つの non aliud はそれぞれ次のものをいみする。

- (1) non aliud = 一性 ……父
- (2) non aliud = 一性の相等性……子
- (3) non aliud = 結合 ……聖霊

それゆえまた、

- (1) non aliud = (2) non aliud
 - (3) non aliud
- trinitas

「このようにして」とクザヌスは書く、「non aliud と non aliud

と non aliud とのなかに一で三な原理がきわめて明らかにあらわされていることは明らかである。もちろんそれは、われわれの把握と把握能力とをまったく超えているが。じつさい、第一原理が、non aliud によつて表示されてそれ自身を規定するときその規定の運動のうちに、non aliud から non aliud が生じ、さらに、non aliud と生じた non aliud とから non aliud にかんする規定(定義)が帰結される。」⁽⁷⁾と。

わたくしが読み理解したかぎりでは、老年の作『非他について』は、対話篇として書かれているにかかわらず、論議がとかく形式主義に流れて、壮年期の著作『知ある無知について』におけるような――たとえ中世的思维の枠組を脱していないにせよ――自由で奔放な思弁の展開が欠けているように思われる。しかし、パウルのような前述の評価もあるわけであり、また少くともクザヌス自身はこれによつてあらたに、神の表示にいつそう深く根本的に迫ろうと努めたことは疑えない。ところでわたくしはここで次の点をぜひとも指摘しておく必要があると思う。

non aliud によつて結合されたさきの二つの命題を一般的にあらわすと、A est non aliud quam A。(AはAと他なものではない)となるが、これは、つまるところ、A(或るもの)がそれ自身と同じであるということであり、これは、のちにライブニッツによつて Chaque chose est ce qu'elle est として定式化されたように、存在および認識の同一性(同一律)に帰着する。クザヌスは、さきにみたように、「さまざまの「他のもの」から「他なものでない」

(それ自身と同じである) という特性をとりだして、これを、この「他なもの」一般の根拠とするのであるが、このようにして結局いつさいものの根拠とされたところの神たる「他なものでない」の自己規定としての三性の定式そのものが、やはり、つまるところ、同一性(同一律)において成り立つことになるのは明らかである。たしかに、前節において論じたように、クザヌスは「あれかこれか」にかかわるいわゆる矛盾律の妥当性を悟性的領域にかぎり、矛盾の一致、三性の統一についての超越的思弁をおこなうのであるが、しかし、かれは、いつさいの存在と認識との根拠に、やはり右のようなみでの絶対的同一性をおくことによつて、根本的には形而上学的立場に立つているといわなければならない。かれは『非他について』のなかで、ディオニシオス・アレキオパギテスから、神が万物のなかで万物となりながらしかも「かれ自身のうちに、また、かれの同一性のうちにとどまる」という章句を引用し、⁽²⁾ 神の絶対的同一性を称揚している。すでに『生成について』において、神を絶対的同一性 (IDEM) として把握していたかれであり、要するに、かれの *coincidentia oppositorum* を成立させる根底には、——そこにいたるまでにはヘーゲルをも想起させる無数の弁証法的命題がみられるにせよ——形而上学的な絶対的同一性が存していたということができる。ここにおいて、わたくしは見る、クザヌスにおける自由奔放な否定的肯定、他在的同一の思弁が、偽ディオニシオスの神秘神学の圧倒的な影響のもとに中世的思惟の幽暗な霧に包まれながら、ヘブライ的な名をもつてよばれる神の威信のまえに跪

いているのを——。このようにクザヌスには全くの転倒がある。多を媒介として運動する自然の統一をこの現実の此岸にみずにかれは、それをこえた彼岸に永遠の静止のうちにとどまる絶対者、神の同一をみる。だが、かれは経験的所与のうえをはいまわる有限主義者ではなく、転倒されたところに定立された「無限者」に自由な思弁をもつて、たくましく強い人間的思惟をもつて立ち向かつた。そこではもはや矛盾律は妥当しえなかつた……。

(1) De non aliud, cap. 4, p. 9.

(2) Apologia doctae ignorantiae, fol. 37 r. ubi <sc. in libellis de conjecturis> etiam super coincidentiam contradictoriorum deum esse declaravi, cum sit oppositorum oppositio secundum Dionysium. De visione dei, I, cap. 10, fol. 103 v ff. Quomodo videtur Deus ultra coincidentiam contradictoriorum. Ibid., cap. 13, 105 v. Coincidentia autem illa est contradictio sine contradictione, sicut finis sine fine. oppositio oppositorum est oppositio sine oppositione, sicut finis finitorum est finis sine fine. De genesi, fol. 69 v/70 r ff. IDEM.

(3) L. Baur, Nicolaus Cusanus und Ps. Dionysius im Lichte der Zitate und Randbemerkungen des Cusanus, 1941, SS. 50—55. J. Übinger, Die Gotteslehre des Nicolaus Cusanus, 1888.

(4) L. Baur, op. cit., S. 53.

(5) De non aliud, cap. 3, p. 7.

(6) 有限な事物のあいだには何ら厳密な相等性は存しない、という思想は『知ある無知について』のなかにもみられるクザヌスの基本思想の一つであつて、ライプニッツに先駆するものである(『单子論』九、河野与一訳、一九五八年、二二九頁)。しかし、クザヌスでは、いつさいの事物の存在の根拠は、「それ自身のうちに」「それ自身によつて」「それ自身から」自存するところの唯一の実体である神であり、いつさいの事物の相異性は、けつきよく偶有性——さらにいえばそれらの無であること——にもとづく。それゆ

え、神の予定調和のうちにあるにせよ、それぞれが個体的な実体として独立活動性 (vis activa) をもつライプニッツのモナドとは異なっている。クザールヌスでは、個性は普遍的なただ一つの実体の「縮限」(本稿第二節の注(3))となっている。ジョルダン・ブルーノのモナドの説は、個体の独立性の主張のうえで、クザールヌスをはるかに踏みこえている (Cf. De monade, numero et figura).

(7) De non aliud, cap. 5, p. 13.

(8) De non aliud, cap. 14, p. 36.

5 総括

さて、以上のようなクザールヌスの思弁の特徴を総括的にまとめれば次のようになる。

まずその形而上学と神秘主義の側面について述べよう。

(1) 絶対的同一性の見地。——前節の末尾の部分で指摘したように、神の絶対的同一性 (IDEM) の立場がかれの coincidentia oppositorum の思想の根底にある。反対、対立、矛盾をどこまでも反対、対立、矛盾として捉えるのは悟性的な有無限の認識の段階であるが、これにたいし、絶対的真理の立場は、いつさいの反対、対立、矛盾の絶対的同一性における解消にある。これがつまり神の直視であり、神におけるいつさいのものの有和である。——ここに神の自己同一性にもづく自己完結的な円環的な神学体系が成立する。「最大なものにおいては、どんな相異性も同一性である。」そしてこの最大なものはあらゆる円環的なものの尺度であるばかりか、最大なものに帰せられるすべての属性は円環的に論証され、したがって、かれにとつて「全神学は円環的である」⁽¹⁾。

(2) 静止の見地。——右に述べた絶対的同一性の見地は静止の見地とみることができ。クザールヌスは書いて、「かれはあらゆる運動の究極目的であり、究極目的としてのかれにおいてはいつさいの運動が静止する。かれこそは、それにおいてはいつさいの運動が静止であるところのあの最大な静止である。……最大な静止はあらゆる運動の尺度である」⁽²⁾。クザールヌスにおいては、自然を超え現実的運動を超えた——絶対的静止における——存在自体ないし神にかなする学という新プラトン派以来の形而上学の規定が、このように継承されている。矛盾は、さきにのべたように、絶対的同一性に解消するのであるが、このように、いつさいの運動の尺度を絶対的静止にあるとする見地からいえば、矛盾は、自己運動の最も内的な源泉つまり弁証法の魂というヘーゲルの規定のまさに反対物とされるわけである。クザールヌスの哲学のなかにはたとえヘーゲル哲学を先駆するような諸命題が無数に見出されるにせよ、両者を区別する基本的決定的なものは、前者には、現実の事物の形態変化の発展がなく、したがって、この形態変化の発展をつきすすめるところの根源力としての内的矛盾が全く欠けているところにある。すなわち、何一つ固定的なものとしてふみとどまるものとはなく、いつさいはただ運動と発展の過程に委ねられており、そこでは、すべての存立はそれ自身のうちに自己の否定を含み、このいみで肯定は否定であるというどこまでも変革的な事物の自己運動の弁証法が欠けているところにある。

(3) 超越の見地。——クザールヌスは、ヴェンクスがかれの哲学を

汎神論として批判したのたいていして、自分は否定の道を経て神にいたろうとするのであつて、汎神論的な偶像崇拜には陥つていないと答えたが、クザヌスの哲学に汎神論的な側面が存していたことは否定しえないであらう。神は、万物が神のうちに存在するということにおいて、万物を包含し、神自身が万物のうちに存在するということにおいて、万物を展開するという『知ある無知について』第二部をつらぬく基本的思想のなかにひとは容易に汎神論を認めることができるであらう。⁽³⁾しかし、基本的には中世的思惟の枠内にとどまつているクザヌスにとつては、これはなお一つの側面にすぎず（それゆえ、そこにみられるものは折衷というか、あるいはむしろ新しい時代の思想を呼ぶためのかれにおける内的矛盾というか）、超越的見地がかれの思想の根底に存することも否めない。いいかえれば、かれにとつて生きた現実とは否定されるべきものである。『知ある無知について』を繙けば第三部にいたると、一転して、仲保者イエス・クリストゥス、つまり、第一部における「絶対的な最大なもの」神と第二部における「縮限されていると同時に絶対的な最大なもの」宇宙（自然）との媒介者たる神人の説が展開する。⁽⁴⁾いうまでもなく、仲保者、神人が必要とされるのは、「絶対的な最大なもの」神がどこまでも超越者であるからにはかならない。——周知のように、ヘーゲルは全存在の（諸形態変化を媒介とする全存在の）どこまでも理性的な把握をめざしている。ここにかれの思弁——対立物における同一性の洞察という弁証法——の駆使される生きた現実の場があつた。これにたいし、クザヌスは、結局におい

て、全存在の彼岸を、プラトンの *ἐπέκεινα τῆς οὐσίας* を「つまりひたすら超越をこそ目指している。それは、全存在が存在とされるというたんなるいみではもはや存在でないものであり、つきつめれば、いつさいの存在を超えるものとしてのニhil (nihil) ではないのか。転じていつさいの輝やく充溢の源であるとされるところのこのニhilの果てしない深みこそ、かれがつとにディオニュシオス・アレイオパギテスに深く傾倒している所以のあの神祕主義の最も内的な本質ではあるまいか。

(4) 神祕主義。——すなわち、クザヌスは書いている、「大デユオニシオスは、神を知解することは、或るものへ近づくというよりはむしろ何ものでもないもの（無）へ近づくことである、と言つている。ところで、聖なる無知はわたくしにつぎのことを教えた、知性には何ものでもない（無）^(ある)ようにみえるものこそ、把握しえない最大なものである、ということ^(ある)を。」このことを知るのかれのいう無知における知、あるいは知ある無知であり、それは徹底的な神祕主義にはかならない。このいみでは、神は、絶対的同一性を *non aliud* をも、すなわちいつさいの肯定的な概念把握を越え、ただただ否定の道により無知に徹して探究されなければならなのであつた。クザヌスが『知ある無知について』の第一巻の終りで否定神学について述べ、さらに第三巻の後半において神祕神学を展開したのはこのためであつた。

それでは次に弁証法の側面について述べよう。

(1) 矛盾の統一（矛盾律の妥当領域の限定）の立場。——一言で

いえば、クザヌスが、倒錯していたにせよ、「無限者」に立ち向かい、そこで必然的に矛盾律の限界につきあたったところに、この立場の意味がある。すなわち、かれは、事物の深い真理——無限性は矛盾律の妥当性をこえるものであることを、中世的な神秘主義の限界内で捉えたのであつた。かれの対立物の一致の思想は、やがてその神学的外被から解放され、ジョルダノ・ブルノの無限な統一的な自然の基本原理となつたことは注目されるべきである。さらに、かれが直線と曲線との同一性の認識に達したことや、また、

——わたくしは以上の所論のなかでは言及しなかつたが——諸事物に属するカテゴリーである他性や不等性についても、「他性は一つのものと他のものから成つている」とか「どんな不等性も、相等しいものとそれを超えるもの（相等しく）とから成つている」とかというように、二つの契機の統一として捉えていることも、注目されるべきである。

(2) 三位一体の思弁的概念（三一性）の追究。——このことの意義を理解するためには、古代末期から中世をつらぬく思想の歴史のなかで支配的位置を占めていた観念論的体系——キリスト教的哲学——の諸内容にたいしたんなる清算主義的な態度をとらないことが必要である。三位一体の意識の秘密は、フオイエルバッハが言うように、自然的基底と人間の本質とのうちにこそあるのであつて、この宗教的表象の概念化は、クザヌスの場合にはもちろんのこと、ヘーゲルにあつてさえも転倒のなかでの思弁以外のなものでもないが、もしわれわれがヘーゲルにいたる観念論的思惟の全達成

のなかにつねにたんなる無のみを見るべきではないとすれば、クザヌスのこの概念的追究の努力についても、一定の限度内で、哲学的思惟の発展史のなかに位置づけることが必要であろう。

さて、たしかに、ヘーゲルにも形而上学と神秘主義があり、つまるところ観念論的倒錯がある。しかし、かれは、現実における事物の形態変化＝発展とその内的原動力である矛盾を把握した。そして、この見地を自然と社会と思惟との全領域に貫徹し、偉大な一つのアンシクロペディーを樹立した。そのさい、周知のように、いつさいの固定と停滞を排してつねに事物を前方へと駆りたてるところの内在的矛盾の見地がすなわちヘーゲル哲学の核心をなしているのであつた。ところで、こうしたことは、かれが、かれにいたるまでの近代社会の発展とそのなかで露呈されつつあつた矛盾、この社会における人類の総実践と科学の全成果、これらを総括することによつてのみ可能なことなのであつた。それによつてかれは、すでに遠くギリシアのバルメニデスによつて捉えられた真実存在の自己同一性の見地（『静止の見地』）をうち破る基本的観点を始めて提示することができた。すなわち、このバルメニデスの射程からの脱却をまず基本におこなつたのはヘーゲルであり、決定的にこれを成就したのはマルクス主義の哲学的唯物論であつた。⁽⁸⁾しかし、偽ディオニュシオスの神秘神学の圧倒的影響のもとになお依然として中世的思惟の枠内にとどまつていたニコラウス・クザヌスは、その限界内で許されたかぎりでの自由奔放な思弁によつて早くも新時代の胎動のかずかずをその胸のうち深く生き生きと予表したが、しかし到

底、絶対的同一性と静止の見地そのものをうち破ることはできなかった。今、別れを告げるために、書物の扉を開いてクザヌスの像をみよう。かれは跪いて祈っている。その喜びとも安らいとも、また予表ともつかぬ眼は見上げている。その眸にうつるところのものは神、つまりいつさいの存在の彼岸にある絶対的無限者、——さらに、その神のもとにおける宇宙（自然）と諸事物との「縮限」（contractio）であり、そしてまた、仲保者クリストゥスによる救済の問題であつた。現実的な諸事物の形態変化の発展のどこまでも理性的な把握という全問題領域は、このようにして、クザヌスの冥想的視野の外におかれていたのであつた。

- (1) De docta ignorantia, I, cap. 21, pp. 42, 44.
- (2) Ibid., cap. 23, p. 47.
- (3) この包含 (implicatio) と展開 (explicatio) という一対の原理は、のちにジョルダノ・ブルノーがいつそう汎神論的な形式で、かれの自然哲学を展開したところのものであつた。
- (4) 『知ある無知』全三巻の構成もまた三二性をなしているといえよう。
- (5) De docta ignorantia, I, cap. 17, p. 35.
- (6) Cf. Giordano Bruno, De la causa, principio e uno, dial. 5.
- (7) De docta ignorantia, I, cap. 7, p. 15.
- (8) 拙稿「アリストテレスの自然認識にかんする基本的諸問題」『哲学』第一三号、一九六三年、四一六頁。